

山間の秋夜（真山民）

夜色 秋光 共に 一闌

飽くまで 風露を 収めて 脾肝に 入る

虚檐 立ち 尽くす 梧桐の 影

絡緯 数声 山月 寒し

夜色秋光共一闌 飽収風露入脾肝
虚檐立盡梧桐影 絡緯數聲山月寒

解説 だれもない軒端のきばに立って、目に映る秋夜の景をありのままに描いた詩。

語釈 ※夜色||夜の色。※一闌||一つの欄干らんかん。※風露||秋風と白露。※脾肝||脾臓と肝臓。腹の中。※虚檐||だれもない軒。※梧桐||青桐。※絡緯||こおろぎ。一説にくつむし。

通釈 ふけてゆく夜の色と秋の月光とが、欄干らんかんを包んでいる。秋風に吹かれ白露をうけて夜気を心ゆくまで十分腹の中に吸い込み、だれひとりいない軒端のきばの、あおぎりの影の落ちているあたりに立ち尽くしていると、今まで静まりかえっていたこおろぎが急に鳴き出して、山月のいっそう寒いのを覚える。